

# 文部科学省委託調査事業「平成 29 年度 新時代の教育のための国際 協働プログラム」海外短期派遣事業報告書

福井県立若狭高等学校 教諭 澀谷 順子

本報告書は、平成 29 年 10 月 15 日（日）～22 日（日）に行われた、文部科学省委託調査事業「平成 29 年度 新時代の教育のための国際協働プログラム」海外短期派遣事業についての報告である。本研修では、新しい時代の教育はどのようにしていくべきなのか、そして、新しい時代に必要だとされている Global Competency とは何なのか、ということを考える研修であった。

## 1. カナダ・アメリカ研修で学んだこと

私たちは、平成 29 年 10 月 16 日（月）～18 日（水）にカナダ、トロント市を訪問し、その後、10 月 18 日（水）～21 日（土）にアメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス市を訪問した。

### 【カナダでの研修】

カナダでの研修として、主に①オンタリオ州教育省の訪問②Greenwood Secondary School の訪問③Teach for Canada の訪問について述べていく。

#### ①オンタリオ州教育省の訪問

オンタリオ州教育省では、オンタリオ州の教育方針や、そこでなされている移民に対する英語教育について学んだ。ここで主に学んだことは、(1)長期的視野に立った教育方針(2)個々の生徒のレベルに応じた英語教育(3)市民意識を育てる教育である。

##### (1) 長期的視野に立った教育方針

オンタリオ州では、長期的視野に立った教育方針が出されており、日本と比べて学校種間接続がスムーズに見えた。オンタリオ州では幼稚園段階から高校卒業段階までを見通し、教育方針が決められているということであった。そのため、ある段階でたとえ一定のことが習得できなかつたとしても、最終的な高校卒業時に習得できていればよいという方針なので、日本に比べて余裕を持って教育活動に取り組むことができるという印象を受けた。

##### (2) 個々の生徒のレベルに応じた英語教育

オンタリオ州で行われている移民に対する英語教育は、個々のレベルに応じた教育がなされていた。移民としてオンタリオ州に来る生徒の年齢も様々であるため、初級から徐々にレベルアップできるように特別なカリキュラムが作られているということであった。カナダに来た移民にとって、英語を使えるかどうかということは死活問題であるため、カナダでの生活にスムーズになじむことができるように配慮されているようだ。

### (3) 市民意識を育てる教育



オンタリオ州教育省

上述の「(1) 長期的視野に立った教育方針」でも述べた通り、オンタリオ州では幼稚園入園から高校卒業までの十数年間を見通した教育がなされていた。それは、市民意識を育てる教育についても当てはまり、幼稚園入園から高校卒業時までの間でカナダ市民としての意識づけをしていくということだ。教育において市民意識が強調されている背景には、カナダにはたくさんの文化的背景を持った人々がおおり、その人々と共存してよりよい社会を作っていく、という意識が根付いているためであるようだ。つまり、カナダで生きていくためには他の文化的背景にある人々との関わりなくしては成立しないため、自分とは違う者に対して理解し、受け入れ、協力していく市民を育てる教育が根底にあるということであった。

現在はグローバル化が進む社会であり、日本のこれからの世代を担う生徒の多くも、社会に出た際には異なる文化的背景を持つ人々と協力して新しい時代を作っていくことになる。この視点からも、カナダで行われている市民教育の方針は、私たちが大いに学ぶべき点があるように感じた。

## ② Greenwood Secondary School の訪問

カナダの Greenwood Secondary School では、移民として新しく Toronto にやって来た生徒へ英語やその他教科面でサポートし、普通高校進学へむけての準備をしていた。この訪問を通して、Greenwood Secondary School は、普通高校進学へ向け、単に教科や英語を教える役割だけではなく、(1)生徒の心のケアの充実(2)コミュニティとしての学校も意識した学校運営がなされていることがわかった。

### (1) 生徒の心のケアの充実

移民としてカナダに来る生徒の多くは、ソマリアなどから戦火を免れやってくるということであった。そのため、中には戦争のため数年間学校に通うこともできない状態でやってくる生徒もいるということであった。戦争が与える生徒の心の傷は計り知れない。そればかりではない。カナダに来てからも、多くの生徒は狭い住まいに多くの家族で住んでおり、決して満足のいく環境で生活できていない者も多数いるということである。さらに、中には親が英語を話すことができないため、生徒が英語による様々な手続きをしなければならない場合もあるようであった。

このように、心に傷を負った生徒のケアを充実させるため、Greenwood Secondary School では取組みがなされているということだ。たとえば、定期的にプロの芸術家を学校に招き、彼らの支援を受けて生徒は芸術作品を作る活動がなされている。芸術作品の創作活動の時間は生徒にとって、日々の厳しい生活を唯一忘れられる時間であり、自分と向き合うことのできる時間である。創作活動を通して、生徒は自分と向き合い、自分自身を芸

術作品に表現することで心を癒すことができるということであった。

## (2) コミュニティとしての学校

Greenwood Secondary School では、学校としての役割だけではなく、コミュニティとしての機能も果たしていた。たとえば、誕生日パーティを開きたいが、家は狭く家でパーティをすることが不可能であるため放課後に学校でパーティをしたいという生徒の申し出に対し、教員は快く承諾したということであった。

また、この学校は普通高校の準備段階であるため、生徒の在学期間も約1年未満である。しかし、生徒は卒業後も友情を育み、また卒業生同士で連れ立って教員をたずねてくるということだ。教員と生徒との距離も近く、生徒は教員に対して何でも話すことができ、安心してカナダの生活に馴染むことができるように作られていた。



Greenwood Secondary School

## ③ Teach for Canada の訪問

Teach for Canada は、オンタリオ市にある NPO 団体である。ここでは、原住民の住む北部と、都市部の南部との教育格差をなくすための取組みがされていた。この団体設立前には、北部地域での教育の問題として、教員が北部に定住せず、南部との大きな教育格差があった。これらの問題は行政レベルで対処するには難しく、そのため NPO レベルでこの問題に対処することを目的に設立されたのが Teach for Canada である。具体的には、北部地域の教員確保のため南部でリクルート活動をされており、そのため、北部地域への教員の希望者の倍率が年々高くなっているということである。北部地域への教員についての適正を図るためインタビューは3回行われており、1回目は人間



として適正か、2回目は教員として適正か、そして3回目は北部地域の環境に馴染むことができるかの適性を図っているということであった。採用後には夏に3週間のプログラムを用意し、北部地域でスムーズにスタートできるようされているということであった。Teach for Canada の職員の方の説明によると、Canada では市民教育がされており、教育の平等社会的正義を意識されているとのことである。また、行政関与が少ないため、自由な教育を推進できるということであった。また、原住民のコミュニティが必要とすることを第一に考えられていた。つまり、教育の哲学がしっかりと確立されており、その点は日本も大いに学ぶところがあると感じた。

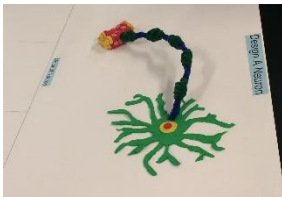
### 【ロサンゼルスでの研修】

カナダのあと、ロサンゼルスに移動した。ロサンゼルスの研修として、①Vaugh International Academy の訪問②Asia Society による研修について述べる。

## ①Vaugh International Academy の訪問

Vaugh International Academy は、PBLを取り入れ、全米の学力調査でも優秀な成績を出している学校である。この学校は公立高校であり、通う生徒もいわゆる普通の生徒であり、地域的にはむしろ貧しい者が多い地域である。

この学校に通う生徒のモチベーションは非常に高い印象を受けた。教員を信頼し、この教員についていけばよい、という信頼感をひしひしと感じた。また、教員も生徒のために全てを捧げており、どんな忙しくても、この生徒のためであればもっと色々



神経細胞の模型

したい、という思いが伝わり、大変感動した。授業では PBL をベースにしており、たとえば生物の神経細胞を学習する授業では、生徒は実際に自分で神経細胞の模型を作り、神経細胞の構造についての理解を深めていた。また、数学の授業では株式投資を扱い、生徒がグループで、実際存在する会社の株を予想する、という取組みがされていた。

授業を見学し、PBL では必要な知識を全て網羅できないのでは、という疑問があったので、教員に質問をした。すると、たしかに知識注入型の授業に比べれば扱う知識は多くはないかもしれないが、部分的に深く学ぶことで、自らさらに学ぶ意欲も生まれ、結果的にその他の知識も自分で学んでいくので問題はない、ということであった。また、学校が気を付けていることとして、生徒の家庭学習の負担がかかりすぎないように、全ての教科で調整し、生徒の家庭学習の時間が 2 時間以上にならないようにしている、ということであった。



生徒の外面と内面を表した面

さらに、この学校では生徒が自分を表現する活動が重視されており、たとえば生徒は自身の顔から型をとり、お面をつくり、表面には他人に向けた顔を示し、裏面には自分の内面を表し、それをクラスの前で発表する、ということがなされていた。また、英語の授業（日本でいえば国語の授業に当てはまる）では生徒が好きな歌手について journal を書くことがなされており、曲の特徴や歌手のこれまでの軌跡を述べる、ということがなされていた。このように、様々な機会が生徒が自分を表現する活動がなされているため、生徒同士がお互いのことをよく理解しており、そのため人間関係も良好である、という

ことが言われていた。

この、PBL を基盤として授業を成立させるために、教科間のコミュニケーションを密にする取組みが学校全体をあげてなされていた。たとえば、一週間のうちに決まった曜日は生徒が普段よりも早く帰る日を設け、教員が授業の進捗状況や、PBL を取り入れる教科間の打ち合わせをする日が設けられていた。また、後で述べる Asia Society による指導を受け、研修会なども頻繁になされているということであった。さらに、保護者との信頼関係



を築くため、PBLを取り入れた最初の頃には保護者への説明を十分に行ったということであった。また、新学期の最初には新しく担任になった教員が家庭訪問をし、生徒の家庭環境についての理解も深める、ということであったが、これについては若狭高校の家庭訪問の取組みと共通していると思った。

また、受け持つ生徒の成績不振が3年間続くとその教員は解雇となるなど、厳しい現実もある、ということであった。この学校の訪問を通して、PBLを進めるためには学校全体で取り組む必要があり、全員が一丸となって取り組む必要があるということである。また、保護者への十分な説明も必須で、生徒、保護者、そして教員が一丸となる必要性を感じた。

## ②Asia Societyによる研修

Asia Societyでは、本渡航全体をしめくくる研修がなされた。ここで、私は若狭高校でのPBLの取組みや、学校の校訓である「異質のものに対する理解と寛容の精神」についての発表をさせていただいた。私の発表について講師から指摘していただいたのは、若狭高校の **curriculum development** の考え方(当初の計画に全て合わせるのではなく、生徒の実態に応じてその都度改良していく、**emergent approach**による方法)はAsia Societyでも採用されている取組みであり、それは生徒の可能性を広げることになる、ということであった。また、若狭高校の生徒が海外の生徒と交流する取組みをした感想も紹介したが、その中にあった、“**there is no border between Japan and other countries**”という感覚を育成することこそが、**Global competency** 育てる上で大変重要である、という感想もいただいた。

### [まとめ]

本研修全体を通して、私たち一人ひとりが、将来どのような社会を意識して教育にあたるか、また、私たちがこれからの社会を作る主体者であるという意識で教育にあたることができるか、ということの大切さを学んだ。たとえば、カナダでは先ほども述べた通り、市民意識が高く、また、教育にも哲学があった。さらに、カナダでは異文化背景を持つ人と生きることが当たり前とされていた。今後、グローバル社会が広がるにつれ、他者との共存が非常に重要であると感じた。その観点から言うと、若狭高校の掲げる教育方針である、「異質のものに対する理解と寛容の精神の育成」は、まさしく **Global competency** の育成である、と実感した。

## 2. 今回の渡航で学んだことの今後の教育活動への生かし方

今回の渡航で学んだことを意識して授業づくりをしていきたい。まずは学校設定科目など、比較的自由度の高い授業で生徒に考えさせる内容を取り入れていきたい。また、英語の授業においても、生徒が考え、自分を表現するような内容をどんどん取り入れていきたいと思う。

問題点として、上の「①Vaugh International Academyの訪問」でも述べた通り、PBLを本格的に取り入れるためには保護者の理解や学校システムの見直しなど、組織的な動きが必要だと感じた。短期的視点では大学入試制度も数年で変わり、さらに、長期的視点では違う文化の人々と生活していかなければならない機会が今後ますます増えることが予想

される。つまり、知識を覚えるだけではなく、その知識を使うことが求められる時代だといえる。今後ますます PBL の要素を授業に取り入れることが求められると予想される。無理のないような形で PBL の要素を増やす取組みについても今後考える必要があると感じた。

最後に、今回カナダ・アメリカで訪問させていただいた学校の先生方は、どの方も自分の取り組んでいることに誇りを持ち、楽しんで取り組んでおられた。まず、教員が楽しんでいないと生徒にもその楽しさは伝わらない。まずは私自身、楽しんで教育活動をしていきたいと思った。

### 3. Global Competency について考えたこと

本渡航は、Global Competency とは何か、を探す旅だった。そもそも、本研修に参加する前、どの参加者も Global Competency が一体どういうものなのか分からず、さらに、渡航が終了した今も、Global Competency を一言で説明することは難しい。しかし、様々な場所を訪問し、Global Competency が何なのかを考える貴重な機会を得ることができ、何となくのイメージらしきものを持つことはできた気がする。

以下に挙げたのが、私がこれからの時代を担う生徒につけてほしいと感じた Global Competency である。

#### ※Knowledge、Skills、Attitudes、Values

コンピテンシー	K	S	A	V
① 責任感（授業、クラスメイトへの貢献）			○	
② 好きなことに対する集中力・積極性			○	
③ 協働力			○	
④ 使命感			○	

以下、ひとつひとつ解説していく。

#### ① 責任感

ロサンゼルス の **Vaugh International Academy** の生徒は、グループで協働活動をする際、一人ひとりの生徒が自分の役割を意識して、グループへの貢献を強く意識していたように感じた。また、カナダでは一人ひとりが自分のすることについて責任を持ち、決定していくように感じた。

#### ② 好きなことに対する集中力・積極性

これは、ロサンゼルス の **Vaugh International Academy** の生徒から特に感じたことである。生徒は好きなことに対する高い集中力を発揮し、自ら学び理解を深めていた。さらに、この過程を通じて自分の成果や活動について誇りを持つようになり、これを他人に対して誇りを持って説明していた姿も印象的であった。このことから、積極的に自分の興味を深めることで、自分に対する誇りも生まれ、自己肯定意識も高まり、自信を持って取り組み

るのではないか、と思った。

### ③協働力

カナダ・アメリカ研修全体を通じて、協働する力の必要性を感じた。これからの時代は、今までの知識だけでは解決できない新たな種類の問題がますます多くなり、さらに一国だけでは解決できず、世界中で協力しなければならない問題がますます増えることが予想される。そのため、様々な背景の利害を超えて、協力して解決していかなければならないことが多くなるだろう。また、個人レベルでは、生徒は卒業後、様々な背景の人々と協働して仕事をしていくことが多くなるだろう。これらのことより、学校に在学している間に、協働する力をつける必要があることを強く感じた。

### ④使命感

これは、カナダの Greenwood Secondary School、Teach for Canada、及びロサンゼルス の Vaugh International Academy の先生方の姿から感じたことである。Greenwood Secondary School では、移民として不安な中生活している生徒がカナダでの生活に馴染むことができるように、温かく生徒を迎え、一生懸命取り組まれていた。また、Teach for Canada では、カナダの南北間の教育格差を埋めるため、行政ではできない取組みをされていた。また、Vaugh International Academy の先生方は、生徒の可能性を信頼し、生徒を少しでも伸ばすために身を粉にして取り組まれていた。このように、自分の信じたもの、ことを貫徹しようという使命感が、今後、どうなるか分からない時代を生きていく上では重要ではないかと感じた。

最後に、本研修では本校の教育理念である「異質のものに対する理解と寛容の精神」こそが、Global Competency の要であるということを実感した。私は若狭高校の卒業生であるため、「異質のものに対する理解と寛容の精神」という教育理念は在学中から日常的に慣れ親しんだ言葉である。今回の渡航を通じて、今後、文化的背景が異なる方と一緒に協力して生きていき、解決方法のない問いを一緒に考え、対処していかなければならない時代が確実に訪れると感じた。私は「異質のものに対する理解と寛容の精神」とは、立場が異なる方のことを理解し、受け入れ、共に生き、社会を創造することだと感じたし、このような時代だからこそ、この理念がますます大切になってくることを実感した。

### 旅程

10/15(日)	羽田空港集合 事前研修 AC6 便 (エアカナダ) 羽田空港発 17:40 トロント着 16:45
10/16(月)	カナダ・オンタリオ州教育省担当者と面会、取組みについてのヒアリング 参加教員による、日本の教育実践事例のプレゼンテーション、およびディスカッション Greenwood Secondary School 見学、実践についてのヒアリング、およびデ

	イスカッション
10/17(火)	Teach for Canada 見学、実践についてのヒアリング、およびディスカッション
10/18(水)	カナダのヒアリングのディスカッション内容のリフレクション・共有後、アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルス市へ移動 AC793 便 (エアカナダ) トロント発 18:45 ロサンゼルス着 21:00 (実際には予定より遅延)
10/19(木)	Vaugh International Academy 見学、実践についてのヒアリング、およびディスカッション
10/20(金)	アジアソサエティの教員研修プログラム (ワークショップ) を授業
10/21(土)	バンクーバー経由で帰国 AC551 便 (エアカナダ) ロサンゼルス発 06:25 バンクーバー着 09:09 AC3 便 (エアカナダ) バンクーバー発 13:15 成田空港着 15:10 (翌日着)
10/22(日)	成田空港着 15:10 成田空港にて解散